心ある人を丁寧にもてなす観光地として

たまに違う道を通ってみるかと気まぐれに車を走らせたら、田んぼの真ん中にビルが建ったような景色にぶつかった。コンクリートの構造物がデンと居座っている。全体を緑色のネットが覆う。ちょっと先にも、その先にも同様の異物が連なっている。

建設中の北陸新幹線の高架橋脚である。石川、富山県に遅れること8年。福井県でも2023年春に、ようやく敦賀まで開業する。北陸「三県」と呼びならわされながら、ひとりお預けを食わされた。そんな気持ちの裏返しか、自治体や観光関係者の期待は今から強い。

この春の知事選でも争点の一つになった。現職を破った杉本達治新知事は、中部縦貫自動車道の県内全線開通と合わせ「100年に1度の大きなチャンス」と、首都圏からの誘客やインバウンドを強力に推進する考えを示している。呼応して福井経済同友会は、全県規模のDMO（観光地域づくり推進法人）設立を呼び掛けている。

日本政策投資銀行北陸支店が3月に公表したインバウンド（訪日外国人客）の意向調査によると、北陸全体の認知度は22％。福井県は9％にとどまる。福井の存在を10人に1人も知らない、というのは残念ではあるが、まあ妥当な数字だろう。

国内で比較的おなじみの東尋坊や曹洞宗大本山永平寺なども、どこの県にあるかと問えば知らない人が多い。まして外国客となると、福井県という存在を意識しないのは理の当然である。これではいけないと、県は以前から「恐竜王国ふくい」を前面に押し出し、県の認知度向上に努めてきた。この結果、県立恐竜博物館の入館者は3月末に、2000年の開館から通算して1，000万人の大台を超えた。

でも「それでいいの？」という声もある。福井の真の良さは、例えば県の中央部に産地が集中する伝統工芸だったり、嶺南地域の素朴な民俗だったりする。地味だから一般受けはしないが、これらこそを伝えたいというのである。言い換えれば、とにかく観光客が来ればいいというのでなく、心ある人を丁寧にもてなす観光地でありたいというわけだ。

目指すのは量か、質か。にぎわい過ぎて困る京都や金沢を両横に見ながら、おそらく最後発の県ならではの議論が始まっている。

福井新聞社　執行役員　論説委員長　遠藤　富美夫